

ブレイブレイド4

神葬の魔剣

あやめゆう

Yu Ayame

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵
挿画
地図
平面惑星
しばの番茶

目 次

序幕	9
第一幕	13
第二幕	33
幕間	53
第三幕	61
第四幕	89
第五幕	117
第六幕	149
第七幕	177
幕後	227
あとがき	252



エリス・エルンセラ



ウオル・ヴィクトリオ



ジン・アークロスト



マキナ



アイザック・アークロスト



アニス・ギネス



シクリンダ



ローズマリー・アークロスト

オートム大陸

テュロス
共和国

レクトラエ公国

ミノイ
ユリウ・
エサル

ステイス

フインレック遺跡

ホロン・ナトス

帝都ヴァリアス

ギェスター帝国

鉄鎖の泉

カルナツク城

セロオ遺跡

ヘクレイス
王国

レイサント大陸

リアス・ディム
王国

ターガ
リンダ

ヒクウエン

ヒラスエイク島

オーム
公国

フル・
フラン・ディ

ウエニエス・
ロツク

サーティン聖央学院

ハレット遺跡

スタールフ
王国

グリプ遺跡

リエト

スヴェリア王国

星影と霊南の森

ハレット大陸

アディメ

ダーガイニング

ルケス

シェシエル
共和国

アボメト大陸

イーシアス

シーシアス

ブレイブレイド4

神葬の魔剣

序幕

×

——生命活動の開始。

彼女がそう理解するのと、今の今まで自分を保管していた溶液槽が消え、液体が零れてびちゃびちゃと水音を立てるのが、ほとんど同時だった。

まるで破水だ。そう思いながら彼女は床の感触を足の裏で確かめる。しなやかな女性の肉体も、わずかに青が掛かった銀髪も、全身余すところなく濡れていた。一瞬前まで溶液槽の中で浮かんでいたのだから当然だ——と理解できるのは、彼女が『虚人』だからだ。ある程度の知識は、あらかじめ植え付けられている。

彼女は、しかし『虚人』としての知識でない何かを頭の中に感じ、ひどく戸惑った。

それは戦渦の光景であり、靈子を喰う巨人であり、逃げ惑う人々であり、逃げ惑う自分だった。

自分は、逃げていた……？

理屈に合わない。私は二十五秒前に生命活動を開始したばかりなのだ。そう考えるが、脳裏に浮かんでは消える様々な光景には圧倒的な現実感があった。確かに目の前で人がたくさん死に、私は気が遠くなるほど壊し続けていたのだ。

「——やあ、無事に『生まれ』たようだね」

不意に声がした。

私を『生んだ』誰かだ、と彼女は推察する。同時に、聞こえた声音に懐かしさを感じてまた戸惑う。

彼女は声の方へ碧色の瞳を向けた。

そこには白衣の男が立っていた。

ぼさぼさに伸ばした茶色の髪と、なんだか意地悪そうな笑みの、まだ年若い男性。

彼は——『虚人』だ。

そう理解できる。何故なら『虚人』は『虚人』を認識できるようになっているからだ。けれど理解できない。どうしてか、彼女は白衣の男を見て、複雑かつ強烈な感傷に襲われたのだ。

「貴方は……ウイリアム？」

自分の口がそんな科白^{せりふ}を吐いた。

男は満足そうに頷^{うなず}き、呆然^{ぼうぜん}と突っ立っている彼女にわざとらしい微笑を見せた。

その笑みは、記憶にないものだ。

……記憶？

混乱する。生まれたばかりの『虚人』にあるのは、知識と技能のみだ。なのに記憶がある。

他人の記憶が——頭の中にある。

目の前にある現実と、脳裏に浮かび消えゆく光景が重なり、彼女はゆらりと蹣跚^{よろよろ}けた。転倒を避けるために動かし足裏の裏が、まだ濡れている床に触れてぴちやりと音を立てる。

ここは——何処^{どこ}だ？

彼女は周囲を確認する。さっきまで自分が保管されていたのと同じような溶液槽^{みくた}がいくつか並べられた大きな部屋だ。照明の類^{みくた}は見当たらないが、つるつるした質感の天井がぼんやりと発光している。

まるで『迷宮』みたいだ、と思う。

それがギユスター帝国の首都ヴァリアスの地下に広がる『虚工物^{フアラベト}』であることを、彼女は知っている。それは知識ではなく記憶だ。そう——あらかじめ植え付けられた他人の記憶。

「ウイリアム……貴方が、私を……」

生んだのか。

いや、間違いない。けれど間違っている。眼前の男はウイリアムじゃない。彼は——こんな笑い方を決してしなかった。他人の退廃^{たいはい}を愉^{たの}しむような悪意の笑みを、浮かべたりはしなかった。

だから違う。違うはずだ。けれど何が違うのか。

判断の基準が——『私』が——揺れている。



「ああ、気持ちちは判るよ。自我が揺れていて落ち着かないんだろう？」

男が、笑んだまま言う。

落ち着かない彼女を嘲る^{あざわ}ように。

「大丈夫、すぐに落ち着く。他人の記憶が頭に埋め込まれようが、身体が違えば発生する『私』は別物だ。だから、君は君だ。君以外では、ない」

ひどく愉しそうだ。

でも、とても悲しそう。

そう思う私は何なのか。そう感じる感受性の根拠は『私』なのか、頭の中の記憶なのか。

びちゃり、と音がする。

その場に立っていられず、床に膝^{ひざ}を突いた。次いで両手を。不必要に長い髪も床に触れ、液体に触れ、濡れる。『虚人』の羊水に——触れて、濡れる。

はあ——と、息を吸って吐き出した。

それから彼女は顔だけを上げ、自分を見つめる白衣の男に問い掛ける。

「——私は、誰？」

普通であれば有り得ないはずの問いを、男は当然のように受け止める。その質問を待っていたとばかりに、悪意剥き出しだった表情を一変させ、ぞっとするような微笑を浮かべる。

ひどく優しいげで、ひどく整った、温度のない微笑だった。その質問に対してはこう微笑むのだと事前決めていたかのような、意味のない笑み。

だから、彼はウィリアムではない。

そう感じる。頭の中の記憶が、彼女にそう判断させる。けれど、その『私』は——誰？

白衣の男は言う。

とびつきの、無意味な笑顔で。

「——おはよう、ジークリンデ」

それが私の名だ。

でも違う。違うと思う。

私は誰なのだ——と、ジークリンデは思った。

第一幕

1

ギユスター帝国の東端、タルトゥク領の港町ディンベルから船が出なくなつて二週間が経過した。

厳密にはさらに一週間前——現在からは三週間前に異常事態は始まつており、一週間掛けて、ディンベルの商船組合に諦念が浸透したのだった。

これは我々の手に負えないのだ、と。

先日、とうとう領主の命が下され、ディンベルからの出港を全面的に禁じられたが、わざわざ言われずとも誰も船を出そうとは思わなかった。

何故なら——海に魔物が出るからだ。

その日、ディンベルの船夫アルフレッド・ノーマンは馴染みの酒場に来ていた。同い年のリタが給仕をする組合員御用達の酒場だ。若い船夫仲間だけではなく、組合の古株もかなりの人数が集まつており、ほぼ満席だが盛況では決してない。

酒場の空気は、葬式さながらの重さだった。

実際、そう的外れでもない状況である。この三週間で漁師や船夫の犠牲は二十を越え、船も出せず漁もできない。ハレット大陸との交易も途絶えており、このままでは半年と経たずに町は死ぬだろう。港町で船が出せないということは、そういうことだ。

「……何なんだよ、あれは」

対面で麦酒を呷つていたニコが、唸るように毒突いた。左隣のカシーダも砂を噛むような顔をしている。他の席も似たようなものだった。

あれとは、言うまでもなく『海の魔物』だ。

「親父の船なんて、去年新しくしたばかりなんだぜ？ なんもかんもオシマイじゃねえか……」

力なく呟くニコに、しかしアルフレッドは同意も同情もせず、葡萄酒をちびちびと呑み続けた。

確かに——気に入らない話だ。

出現した『海の魔物』は、巨大な顎で漁船をばり、ばりと噛み砕いた。アルフレッドは目の前で見たのだ。鯨だか鯨だか判らないようなばかりかいモノが、船も人もお構いなしで咀嚼する様を。

対処する手段などなかった。そのときアルフレッドが助かったのは単に運が良かったただけだ。組合長の話では、領の騎士団は出せないという。

ようするに、どうしようもないのだ。

その、どうしようもないと諦めているみんなのことが——自分も含めて——アルフレッドは気に入らない。酒場で湿気た面を突き合わせるより、やるべきことが何かあるはずなのだ。

「ちくしょう、なんでこんな——、痛ッて!」

ごん、と音がして、ニコが素っ頓狂な声を上げた。給仕のリタが盆の縁で頭を小突いたらしい。

「いいかげんになさいよ」リタは言う。「ぐちぐち言つてどうなるのよ? だいたいね、船だけで済んでよかったじゃないの」

「船だけで? あの船がなきゃ——」

「命はいらないってかい」

冷えた視線でリタはニコを睨む。それから、ほんの一瞬だけアルフレッドに視線を向けた。ニコも同じように一瞬だけアルフレッドを見て、気まずそうに視線を逸らす。仕方ないので肩を竦めておいた。

「いいさ。船は俺たちの命なものな」

「いや……悪かった。おまえの気持ちも、考えてなかったな……すまねえ」

気まずそうに頭を下げるニコの素直さは美徳だ。アルフレッドは小さく苦笑し、落ち込むニコの杯に麦酒を注いでやった。

「いいって言っただろ。うちの親父は、おまえの親父と違って知つてんだ。判つてゐるのに海へ出て、案の定の結果だった。とんだ間抜けだ」

その言葉にまた酒場の空気が重くなる。リタも氣まずそうに息を吐き、給仕に戻ってしまった。年配の船夫たちは努めてアルフレッドらの席へ視線を向けないようにしていた。

もう一度、アルフレッドは苦笑して肩を竦める。

何が苦笑の種かといつて、そんな間抜けを輕蔑する氣にならない自分が、だ。むしろ葬式みたいに集まっている船夫たちこそ氣に入らない。もつと言えば、そこに含まれている自分が。

——と。

入口の開き戸が押され、客が入って来た。

馴染み客ではない。それ以前にディンベルの人間ですらなかった。旅装の男と、人形みたいに整った女と——妖精だ。人間の手首から肘くらいまでの体長の、背中に羽の生えた、比喩でない本物。

少年と青年の間くらいのも、やや煤けた亜麻色の髪
の男が無遠慮に店内へ歩を進め、酒場の客席をぐるりと眺めて唇の端を吊り上げた。

「この店に漁師が集まつてゐるって聞いたんだけど」

その言葉は給仕のリタへではなく、客席の船夫たちに向けられたものだつた。

「……船を出したいのか？」

アルフレッドは言つた。ニコやカシード、周囲の組合員がぎよつとしたふうに眉を上げる。

「そうなんだよ」と、そいつは軽く答えた。「世界の真ん中に用事があつてさ」

連れらしき人形めいた女はぼんやり顔で店内を眺めており、男の肩に腰掛けてゐる妖精の方は、客席の船夫たちに値踏みの視線を向けてゐる。

「船は出せない」

答えたのは、端の席で吞んでいた組合長だつた。年月が刻んだ顔の皺が、不快さに歪んでゐる。

「なんでまた？」

組合長の不機嫌に腰の引けた様子もなく首を傾げる。雰囲気を感じないその様子に、ますます組合長の皺が深くなるのが判つた。

「領主からの命で、船を出すと言われている」

「どういう手続きをすれば船が出せる？」

「もちろん領主殿の許可があれば船は出せるさ。出せるというだけで、あんなバケモノのいる海に船を出す莫迦ばかがいるかどうかは知らねえがな」

嘲笑ちやうしょうを見せる組合長だったが、多分に自嘲じちやうも含まれていただろう。男の方はそんな機微など判るわけもなく、軽く肩を竦めて、

「はあん。『海の魔物』ね。だからこんな昼間から酒場で呑んだくれてるわけか」

と言った。その科白に船夫たちが顔色を変える。ガキが知ったようなことを言いやがって、と。アルフレッドにはその気持ちも理解できる。

船夫は慎重であることを求められる。海の間人は臆病おくびょうなくらいでちよいどいい、時化しげに船を出すのは三流だとアルフレッドは教え込まれた。

だが、それを教えたはずの父親は、バケモノのいる海にわざわざ出て行って死んだ。

アルフレッドは半ば無意識に男の顔を凝視ぎようししていた。どう見てもまだ十代のガキだ。なのに面構おもがまえに父親と同じ何かが含まれている。

——知っている、という感じ。

海に怪物が出ることなど、知っていたんじゃないのか？ その上で、船を出してくれと言ったのではないか？ アルフレッドにはそう見えた。

そいつは船夫たちの殺気を軽く受け流し、何も言わずに踵きびすを返して店を出て行った。人形みたいな女も、肩に乗っていた妖精も、何も言わなかった。

後には白けた空気が残される。アルフレッドは葡萄酒をひと舐めなし、溜息ためいきを吐ついた。

「……あんだ、何か変なこと考えてない？」

リタがぎろりとアルフレッドを睨む。

変なこと、とは——例えばあのガキに協力しようというようなことだ。もちろん、それがどれだけの愚行かなど、言われるまでもなく判っている。

そう——知しっているのだ、そんなことくらい。



世の中の混乱と天気の良いさは無関係なんだな、とジン・アークロストはデインベルの外れ、街道に出るちよつと手前の草原に寝転がりながら思った。

空は晴天で、ぽかぽかした陽気だった。草を撫でる風が心地よく、特に用事がなければのんびり昼寝でもしたいくらいだ。

「……で、どうすんのよ。ヴァリアスからこつち、『人喰い樹海』を避けて『幻影騎士団』を迂回して、三週間も掛けて港町まで来たら今度は『海の魔物』ですって？ まるで『虚工物』の見本市じゃない。ウィルも何が楽しくて『虚工物』を解放して回ったんだか。よくやるわよ、まったく」

地面に直接寝転がるジンの胸に腰を下ろして文句を言うのは、妖精のエリス・エルシエラ。

「さらに言うなら、これまでの道程と違って、海は迂回できませんね」

ほんやり顔で冷静に述べるのは『虚人』のマキナだ。霞色の髪が風にそよいでいるが、当人は気にしたふうもない。

「さすがにピアスエイク島までジンとマキナを抱えて飛んで行くのは無理だからね」

小さな手でジンの胸をぺちぺちと意味なく叩きながらエリスが言った。

「んなことあ判ってるよ。どうしても船が要る。正確には船と船員がな」

というのも、ジンには操船技術がないからだ。これまでの人生で船に乗ったのは、ハレット大陸からオートム大陸への連絡船が一度だけ。なので例えば船を盗んで勝手に出港したところで、大海原で迷子になるといって笑えないオチしか待っていない。

「この領主に相談してみる？ 船を出したいから許可をくれってさ」

「んなもん、門前払いがいいところだ。それに肝心なのは領主の許可じゃなくて、船員の協力だろ」

それはジンの苦手分野だった。

他人に協力を頼んだことなんて、思い出せる限りほとんどない。サーデインの逃亡劇でも、カルナツクの『鉄鎖の泉』でも、帝都での騒動でも、ジンは自分のために何かをしてくれと他人に頼むことはしなかった。できなかった、というべきか。

協力してもらつてるといふなら、せいぜいエリスくらいのものだろう。

「あー……どうすつかなあ……」

結局は漁師に頼むしかないのだが、ただ頼んでも無駄だろう。弱みを握るか、交換条件か、少なくとも取引にしなければ話にならない。

『怪物退治』を交換条件にしては？」珍しくマキナが提案した。『虚神』よりも強力な『虚工物』でなければ、問題ないかと思いますが」

「ふらつとやって来た余所者のガキが怪物退治してやるって言つて誰が信じるんだよ？　まあ、頭の悪い物好きがいるかも知んねーけど……」

はあ、と溜息を吐いたところで、誰かが歩いて来るのに気付いた。さっきの酒場で見た顔だ。

やや背が高く、壮健という単語がよく似合う青年だった。がっしりしているが、戦闘用ではなく仕事用の筋肉だ。漁師——だろう、たぶん。

「よう、困つてる様子だな」

落ち着いた物腰と、よく通る低い声。

「あんたらもな」と、ジンは寝転がったまま答えた。『海の魔物』にてんてこまいって感じた」

「何しに来たのよ？」

ジンの胸に座ったまま、エリスが漁師を睨んだ。漁師の方は妖精の人間嫌いに怯むでも苛立つでもなく、小さく苦笑して肩を竦めるだけ。

「ちよつと気になつてな。訊きたいことがあるから探しに来てみたのさ」

「あー……」目の前の漁師にあまり不快感を覚えな自分、ジンには不思議だった。「……まあ、いいや。なんでも聞いてくれ。卑猥なこと以外な」

「おまえ、船を出したいのか？」

余計な言葉を挟まない、単刀直入な問い。

思わずジンは漁師の目を覗き込むが、揶揄も嘲りも見当たらなかった。ただの質問だ。

「ああ」

と、だからジンはただ頷いた。

漁師はそんなジンを少しの間だけ眺めるようにして小さく頷き、次の問いを口にする。

『海の魔物』を、どうにかできるか？」

「可能です。おそらく」

答えたのはマキナだった。ほとんど即答だったの
で口を挟む暇もなかった。

そして漁師の方も、即答に対して即答した。

「よし、判った。出してやるよ、船」

「……マジで？」

さすがに身体を起こし、ジンは眉を寄せて漁師の顔を凝視した。からかっているのか、あるいは何か裏があるのか。そう思ったのだが――。

「マジだ。嘘じゃない」につ、と男前に笑む漁師で

ある。「俺たちは『海の魔物』に困ってんだ。退治してくれるっていうなら是非もないさ」

「おいおいおい」思わずジンは突っ込んだ。「こんなガキの言うことを信じるのか？」

「信じるわけじゃない。賭けるんだ」

答える漁師の表情には、稚氣も酔狂も見えない。普通に真面目で、普通に真剣だ。

「いや、まあ……ありがたいんだけど……賭ける根拠とか、あんのか？ ただの勘か？」

自分にとつて都合のいい状況というものが不慣れで、疑り深く訊いてしまった。

「だって、おまえらが海に出たいんだろ？」

と、漁師は気を悪くしたふうもなく答える。

「海にバケモノが出るって知って海に出たいって言うんだ。怖がつてるふうでもないし、こうして話してみても、口は悪いが頭が悪いようには見えないしな。自殺志願って感じでもなさそうだ」

「あー……ああ、そういうこと」

海に出ると危ないと知って海に出たいやつは、莫迦であるか対抗手段を持っているか——と判断したのだろう。今の口ぶりからすると、莫迦である方の可能性は切ったわけだ。

しかしそれでも、何か裏があるのではと疑ってしまふのは——これまでの経験のせいだろう。

実際、サーデインからここまで、ろくな道程ではなかった。この先だって怪しいものだ。どうせろくなことは起きないに決まっている。

「で、どうする？ 俺の船に乗るか？」

今日はどこの飯屋にするかと聞くような、やたら軽い言い方だった。

「ああ」とジンは頷く。「悪いけどよろしく頼む。

あんたの安全とか保証できないけど」

「いいさ。それじゃあ今夜のうちにしようぜ。宿はとつてあるのか？」

「いや、野宿は得意なんだ」

「女連れだろ？ 考えてやれよ」

呆れたふう^{あき}に肩を竦める漁師だった。

マキナは相変わらずのほんやり顔で、エリスは胡散臭^{さくさく}そうに漁師を睨んでいたが、どうしてだかジンは漁師の態度に親しみのようなものを覚える。

「そうになると……そうだな、家に来いよ。親父が死んで、誰もいやしないんだ」

やはり軽く言つて、漁師はふと思ひ出したように付け加えた。

「——アルフレッドだ。アルフレッド・ノーマン。

よくアルつて呼ばれる」

「あー……つと、ジンだ。羽生える方がエリスで、ぼけつとしてんのがマキナ。まあ、よろしく」

「おう、よろしくな」

さらりと笑うアルフレッドにどうして好感を覚えるのか——ジンにはよく判らなかつた。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。